

## 絵を描くことと生きること

### －絵に関する創作活動を継続してきた個人へのインタビュー調査から－

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
臨床心理学領域  
高田 理子

臨床心理学の領野において、描画療法・描画テストなど、心理臨床における描画について論じた研究は数多い。しかし、臨床場面に限定せず、「絵を描くこと」がどのように体験されているのか、描き手自身の体験語りを聴取する研究はあまり見当たらない。

本研究は個人の内的生活史において「絵を描くこと」がいかなる体験であるのかを明らかにすることを目的とし、幼少期から絵を描くことを続けてきた成人4名に対し、半構造化面接を行った。分析にあたっては、調査協力者の内3名の発話資料から、「絵を描くこと」と「日常を生きること」の連関に注目しつつ、内的生活史というテーマをよく捉えているであろう部分を抽出し、パーソナル・ナラティブとして再構成した。

本研究の結果、個人にとって「絵を描くこと」が、ときに他者と関わるための媒介となり、ときに厳しい現実を生きるための支えとなっていたことが示された。また、「絵を描くこと」のそのような意味づけは固定的なものではなく、発達や内的変化に応じて変容し続けるということが示唆された。さらに、描き手は自分の作品を評価する他者の存在を敏感に意識しており、内在化された他者の視点が絵に影響を及ぼすことが推察された。

本研究では、「絵を描くこと」が内的世界と外的現実、あるいは自己と他者の間で為される行為であり、個人の生にとって重要かつ多様な働きを発揮しうることが示された。